

螺鈿

螺鈿（らでん）は、表面の漆の中に真珠層を埋め込んだ漆器の装飾技法である。8世紀に中国から伝わり、日本の芸術家たちは小物から武具、建築物に至るまで、この技法を用いて装飾を施した。

螺鈿は軟体動物の貝殻の内側にある虹色の層を利用したもので、「真珠層」と呼ばれている。アワビやチョウガイなど多くの貝が螺鈿に適した真珠層を形成するが、その色や質はさまざまである。真珠層は、薄いウエハース状になるまで貝殻の両面を研削して、抽出される。厚さ0.1～2ミリのものを「厚貝」、0.1ミリ以下のものを「薄貝」と呼び、厚さによって使い分けられる。また、真珠貝の小片を粉にしたものは「みじん貝」と呼ばれ、虹色に輝く。

真珠層から、糸のこ、精密ナイフ、パンチングプレート、酸エッチングなどで、思い描くデザインを切り出し、漆器に貼り付ける。厚みのある貝は象嵌で、薄い貝は漆を塗って貼り付ける方法が一般的である。最後に漆を塗り、表面を磨いて完成する。

螺鈿は1999年に、重要無形文化財に指定された。